



超高齢社会を迎えて患者の多くが 75 歳以上になるなか、生活習慣病や老年症候群などで多病の高齢者は多剤服用となることが多く、薬物有害事象や服薬管理上の問題を生じやすい。国の統計では 75 歳以上の約 4 割が 5 種類以上、約 1/4 が 7 種類以上の内服薬を 1 つの薬局から調剤されている現状がある。

そこで重要なキーワードが「ポリファーマシー」である。ポリファーマシーは、単に薬剤数が多いこと(多剤服用)ではなく、薬剤が多いことに関連して薬物有害事象のリスク増加、服薬過誤、服薬アドヒアランス低下などの問題につながる状態、つまり「多剤服用＋(潜在的な)害」を指す。したがって、ポリファーマシーの是正では、一律の薬剤削減をめざすのではなく、処方適正化という観点から、患者の生活機能や生活環境などを考慮に入れて包括的に処方を見直し、多職種で対策を講じることが求められる。

本書は、おそらく全国で初めて「ポリファーマシー外来」を掲げて、医師・薬剤師協働による処方適正化に長年取り組んできた編者が、処方適正化の実践を平易に解説した書籍である。個人差の大きい高齢者において、処方に絶対的な正解は存在しない。試行錯誤しながら最適の処方を探し続ける作業が求められるが、

それには論理的思考と多様な意見の擦り合わせが大切である。そこでとても参考になるのが、本書のカンファレンスである。いずれもポリファーマシー対策の手だれである計 7 名の出席者による 11 症例のカンファレンスは臨場感にあふれ、処方内容をブラッシュアップしていく思考プロセスがよくわかる。もう 1 つ役に立つのが、各領域の専門医による薬の始め時・やめ時である。領域によっては始め時が省かれているのもまた面白い。専門医だからこそわかるやめ時であるが、その筋のガイドラインにはまず書かれていない。そして当然最初に目を通しておくべき「処方上手の 10 カ条」と患者とのコミュニケーションには、編者らが本書に込めたエッセンスを味わうことができる。

かかりつけ医およびかかりつけ機能を担う薬剤師の方には、実践書としてぜひ本書を読んでいただきたい。また、全体的に実にわかりやすく書かれているので、看護師をはじめとして医療介護にかかわる多職種にも十分に理解できる内容であろう。とにかく処方はこのままで本当にいいのだろうかと思いつく疑問をお持ちの方、一歩進んで、処方薬の断捨離をどう進めたらいいのだろうとお考えの方には、ぜひともお薦めの 1 冊である。